

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第四回目の今回は、全国から過去最多の二〇八〇点の力作が寄せられました。

また、このたび作家の井出孫六先生が本賞のために素晴らしい作品をお書きくださいましたことは感謝に堪えません。厚くお礼申し上げます。

〈へ生くぎることとは創くること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■ 特別作品

「僕等の八月十五日」

井出 孫六(作家) …… 4

■ 中学生部門

最優秀賞 「愛しき太古の生きものと私」 兵庫県 赤穂市立赤穂中学校

三年 瀧谷 咲月 …… 10

優秀賞 「震災遺構は残すべきか」 宮城県 仙台二華中学校

一年 菊地 馨 …… 14

佳作 「悲劇のヒロイン病」 兵庫県 姫路市立安室中学校

三年 土屋 結布 …… 17

■ 高校生部門

最優秀賞 「奏でよう、人生の組曲」 兵庫県立伊丹高等学校

二年 広石 亜美 …… 20

優秀賞 「口の中の氷」 兵庫県 西宮市立西宮東高等学校

一年 木村 直希 …… 24

佳作 「私の夢」 兵庫県 神戸市立神港橘高等学校

一年 三好 一那 …… 28

■ 一般部門

最優秀賞 「古の徳利の慰め」 兵庫県 姫路市 (公務員)

原田 裕乃 …… 32

優秀賞 「おみちように」 愛媛県 伊予郡 (無職)

高市 俊次 …… 36

佳作 「何でもない日に」 東京都 大田区 (主婦)

星 香弥乃 …… 40

■ 概要

……… 44

特別作品

僕等の八月十五日

井出 孫六（作家）

いとう まさひろく

一九三二年長野県生まれ。著書は、『秩父困民党群像』、『アトラス伝説』（直木賞受賞）、『終わりなき旅——「中国残留孤児」の歴史と現在』（大佛次郎賞受賞）ほか多数。東京都在住。

特別作品

僕等の八月十五日

井出 孫六（作家）

一九四五年四月、僕は信州の山に囲まれた盆地の中学の二年生になっていた。四、五年の上級生は早くから東海地域の軍需工場に動員され、宿舍が爆撃され、負傷者が出たとの報告が母校に届いていた。僕等下級生は母校に止まったまま、戦時体制にくみこまれていった。三月の末、時の小磯内閣は政令「決戦教育措置要綱」を閣議決定し、「国民学校初等科以外の授業を四月から向う一年間停止する」との無謀な布告をし、県はそれに即応するかのように「食糧増産のため各学校の校庭を“菜園化”すること」と決定し、一台のトラクターと生徒数に応じた唐鍬が貸与され、数十年先輩たちがローラーを導入して踏み固めてきた広いグラウンドを掘り起して芋畑にせよとの指示が下ったが、肥し桶を二人で天秤棒にかかげ芋畑に運ぶのは難事業だった。校庭の「菜園化」は並大抵のことではなかった。五月から六月にかけて雨はなく、空は明るく輝いていた。盆地の上空三千呎ほどの高みに現われた航空機が美しい飛行機雲を残して北に向けて飛び去るのを見あげていた。配属将校の叱咤で、僕等は出来上ったばかりの防空壕にかけこんだのだが、配属将校は壕の中

で、次のようなことを口にした。

「ゲラム、サイパン、テニアンは我が軍の玉砕・壊滅した小島だ。敵は二カ月ほどで三つの島にB 29の基地を完成したらしく、先ほどのB 29野郎はどれかの小島から偵察に来たのだろう。この盆地にはB 29の攻撃目標はない。むしろ巡洋艦のカタパルトから放たれる戦闘機に注意してほしい。学校には森と林が恵まれているから、森林を防空退避所としてほしい」と。

戦時体制に組みこまれ、授業らしい授業がないまま、七月学期末の試験期になっており、僕は灯火管制用の黒い蛇腹付きの電灯のもと、翌日のテストの準備に入っていた。助動詞 shall と will の活用、使い分けを整理し、ノートに You shall die, I will kill you! と書きわけている時だった。七月十七日午後十一時半に近い頃のことだ。闇をつらぬいて体に染み渡る轟音が、幾重もの山脈をこえて伝わってきた。物干し台から夜露に濡れた二階の屋根にゆっくと登りきったところで、屋根瓦にしっかりと掴ったまま、闇に向かって目を凝らしたのだった。深夜およそ一時間近く、地獄の釜の煮えたぎるような轟音が人々の眠りを妨げたものか、方々にささやき合うような声が聞こえてくる。稲荷ヶ丘に据えられている監視哨からも微かな声が伝わってくる。事態をはかりかね、警報ボタンを押すのをためらい、地鳴りに似た轟音をやりすごすしかなかったのかもしれない。

七月十七日深夜の轟音は七月の末つ方、新聞の特報によって、敵艦隊による水戸、日立などへの猛攻だったことが広く伝えられたが、正体の知れない遠隔地の闇から伝わってきた不思議な音として、今なお忘れられない。

関西の大学に在籍し、若狭湾の海軍工廠に迎えられていた兄の敬吾が七月の末つ方、突然帰省してきた。汗まみれの学生服に、頭陀袋のようなリュックを背負っており、中には英字紙、英文雑誌やパンフなどが詰めこめられていた。冷たいタオルが渡されると、角帽を脱いだ、髪の後方は黒々としているのに、額の生え際の髪が帯状にはげているのが、皆の目に映った。夕食にはお粥を注文し、好きな筍の酒も飲まず、海軍工廠が自然解散となって職員全員が解雇されたのだと語った。

夕食を終えた敬吾は布団の上に倒れこむように横になり、二晩三日昏々と眠り続けたので、僕が用心棒となつて、水や軽食の運び屋となり、久しぶりに敬吾と話す機会がふえた。八月に入って間もなくのこと、「俺の見るところ、八月十五日がやばい。わが国は滅亡する」と言いながら、一枚の英文ペーパーを出し、七月十六日ニューメキシコで実験に成功したという原子爆弾がまもなく日本に持ちこまれることを明快に図解してくれた。

八月六日、広島の中二生の一隊が朝八時に登校し、強制疎開と指定された建物の解体作業にとりかかった午前八時十五分、晴れ上った広島空に現われたB29が投下したの

もニューメキシコ製の原子爆弾で、解体作業にとりかかっていた中学二年生全員が被爆の悲劇に倒れたのだった。

「中学二年生が最前線に立たされているんだ。二年生、用心しろよ！」と敬吾が耳許に声をかけてくれたのが忘れられない。

八月十五日正午、僕たちは盆地の母校に出かけてラジオを聞いた。なぜか猛烈な雑音が流されて天皇のことばがまるで聞こえなかった。

敗戦の年の八月十八日、すでに暑中休暇が終わり、僕は早朝、四キロ北にある中学に足を向けていた。校舎に人影はなく、校庭に出てみると、五月、霜の降りなくなった頃、薄らいた根菜類が順調に育って、緑の海になっていたのが盛観であった。午前七時を廻った頃、南の山あいから、金属音と共に一機の戦闘機が姿を現わし、校庭すれすれに降下してきて、芋畑が爆風でそよぐのに驚かされていると、機内の小窓から飛行帽姿が半身乗り出すような姿で、僕に声をかけている。むろん爆風で声はきこえないが、どこかで見かけた顔、……数カ月前、春の錬成会で五人の先輩が講堂で30分ずつ講演した。その中の一人がN中尉だと気づいた僕が手をあげたとたんに彼も手をあげた。母校に挨拶したN中尉の乗る戦闘機飛燕ひえんは岩村田国民学校の校庭に母宛の手紙を落したあと、浅間山山頂で自爆した。自爆した飛燕のかたわらにN中尉の白骨が発見されたのは翌年五月のことだった。

第四回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 赤穂市立赤穂中学校 三年

愛しき太古の生きものと私

瀧谷 咲月

私は、今年の夏、「化石のたのしみ〜愛しき太古の生きものたち〜」という若一光司さんの本を読んだ。この本を読もうと思った理由は、「愛しき太古の生きものたち」というサブタイトルに込められた筆者の化石に対する想いに、自分と近いものを感じたからだ。この本の第一章には、筆者と化石との出会いから、化石採集にかけた日々ことが綴られている。第二章には、筆者の考えを交えた化石生物たちのプロフィール、第三章には、化石関係のニュース、そして、第四章には、日本で実際に化石が発見できる著名な化石産地について記されている。

中学二年、初めて化石を発見した筆者と、その友人の胸の高鳴りが、私にも伝わってくる。まるで、一つの化石を一緒になって覗き込んでいるようだった。その石の断面には、原生植物と見間違うほどにみずみずしく、そして美しいシナグリの葉が浮かび上がっている。一五〇〇万年も大昔の木の葉。筆者の化石を持つ手が震えるのと同時に、私の本を持つ手も震える。それは、人間の知覚では決して感知することができないほどの、悠久たる

時間を手にするということへの大きな感動であった。

化石採りは子供だけで行つてはいけなさと念を押されていたにもかかわらず、友人と二人だけで採集に行つた筆者に、私は自分の姿を重ねた。小学校一年の時、家族と訪れたフリーマーケットで、小遣いの五〇〇円を手にした私は、「絶対に離れないように」と言われていたにもかかわらず、家族から離れ、ある店の前に立っていた。ほとんどの店が古着や骨董品を並べている中、その店は石を並べて売っていた。私は、なぜか気になって、長い間座り込んで、その石たちを見ていた。今までに見たことのある石とは少し様子が違っているようで、小さく先の尖っている物から、ぐるぐると渦を巻いている物まで、様々だった。不思議に思っていると、「それは化石と言ふんだよ」という声が聞こえた。出店者のおじいさんだった。

そのおじいさんには、私が家族に見つかつてしまうまで、たくさんのことを教わつた。化石とは、一千万年以上も昔の生き物たちの遺骸や生活の痕跡であること。小さく先の尖っている物は恐竜の歯であること。ぐるぐると渦を巻いている物はアンモナイトということ。それが、私と化石、私と太古の生物たちとの出会いだつた。帰る頃に私の手に握られていたのは五〇〇円ではなく、虹色に光るアンモナイトと、白っぽい石だった。白っぽい石は、おじいさんがおまけで持たせてくれたもので、「割ると、きつと良い物が出てく

るから、ハンマーとタガネで割ってみなさい」ということだった。

筆者が化石採集をするところを読んで、その石を割った時のことを久々に思い出した。ハンマーとタガネを手に、石を端の方から剥がすように、慎重に割っていく。小学校一年の私には、ハンマーは重たく、何度も自分の手を打ちそうになった。その都度、母に「交代しようか」と言われたが断った。どうしても自分でしたかったのだ。石を割るのに集中するあまり、周囲の音が段々聞こえなくなっていく。聞こえてくる音が自分の心臓の音と、石を叩く音だけになった、その時だった。カツンとひときわ大きな音を立て、石が割れた。ゴトリと地面に横たわった石には、一枚の葉が現れていた。拾い上げてみると、手の先から全身に痺れが伝わってゆくような感覚を覚えた。一千万年前の歴史が体中を駆け巡り、感動という言葉では表しきれないほどの感情が込み上げた。その感情がどのようなものなのか、なぜそこまで心が動かされたのかは、幼かった私にはよくわからなかったのだが、長い間、その記憶と葉の化石は、私の宝物として一番の輝きを放つものであった。

それらが輝きを失っていったのは、いつからだっただろうか。中学三年生になり、受験勉強に追われるようになって、化石採集の楽しさを忘れてしまった筆者の姿は、さながら私自身のようにであり、いてもたってもいられなくなった私は、数年ぶりにいつの間にか忘れていた幼い頃の記憶を手を取った。自室の戸棚の奥底に丁寧にしまい込んでいたその化

石は、当時と一切変わりのない輝きを放っていた。一千万年前の「過去」に、自分が抱えている不安も葛藤も、ありとあらゆる悩みも吸い込まれてしまつて、幼い自分の心が帰ってくる。長い間見失っていた自分がそこにいた。

いつかまた、自分を見失つてしまいそうなとき、葉の化石を片手に、再びこの本を開きたいと思う。きっと、そこにいる幼い頃の自分と、私によく似た筆者が、いつまでも私を連れ戻してくれるだろうから。

中学生部門

優秀賞

宮城県 仙台三華中学校 一年

震災遺構は残すべきか

菊地 馨

ぐにやりと折れ曲がった鉄骨、ガラスが割れて黒々と洞穴のように大きく口を開けた窓。良く見ると一階の床が二階の天井を突き破っている。

震災遺構となった旧石巻市立大川小学校の前で、私はただただ呆然と立ち尽くしていた。東日本大震災から七年の歳月が過ぎ去った。当時五歳だった私は、震災で何が起こったか、詳しいことを知らないまま成長した。私の祖父の家は津波で流され、翌年祖父は亡くなった。父の職場も津波に襲われ、車が流されてしまった。被災者と呼ばれる立場にいた一家族である。それでもその悲しい記憶も徐々に曖昧になり、私は震災をどこか他人事のように感じ始めていた。そんなときに、私は家族と大川小学校を訪れたのだ。

北上川河口沿いの釜谷地区。見渡すばかり野原と荒地が広がるように見えたこの地区は、震災前は学校や交番や商店が立ち並ぶ集落であった。しかしかつて街があったことを偲ばせるものはもう何もない。震災が引き起こした河川津波によって全て壊滅してしまっ

たのだ。今は土地のかさ上げのための土を運ぶダンプカーが大きな音を立てて行き交うばかりである。土煙の立つ荒野の中に大川小はボツンと佇んでいた。

大川小については、以前から知っていた。大勢の子供たちの命を奪った津波の悲劇と、今も続く遺族と石巻市、宮城県との裁判が、時折大きく報道されていたからである。

しかし、実際にその場所に身を置いた時、私は予想していた以上に大きなショックを受けた。テレビや新聞ではわからない被害の生々しさを、その場に立ってみて初めて実感したのである。無残に破壊された建物にも衝撃を受けたが、最も愕然とさせられたのは、ここに逃げていれば助かったとされる裏山への距離の近さだ。津波警報を知らせる広報車が通つてからの僅かな時間でも十分逃げられる距離であり、山の斜度も思っていたより緩やかであった。この地形を目の当たりにして、遺族の方々の、どうしても子供の死を諦めきれない無念の気持ちが始めて理解できた気がした。加えて、津波のとてつもなく大きな威力に対し、激しい恐怖が体を突き抜けた。

この口が利けなくなるような恐怖は、以前も味わったことがある。二年前、広島原爆ドームを訪ねた時だ。原爆投下からは七十年もの歳月が経っているのに、時が止まったようだった。まるで自分が一九四五年八月六日その日に居合わせたような感覚に陥った。

大川小をはじめとする震災遺構を残すことについては、反対意見も多くあるそうだ。見ているとあの日を思い出してしまい辛くなる、という当事者の気持ちはもつともである。保存のための費用の捻出、耐震性の問題もある。しかし大川小学校や原爆ドームを訪れた体験から、震災遺構は未永く後世に残していくべき価値あるものだとは強く思った。

原爆ドームを残すことにも少なからぬ反対意見があったそうだ。しかし、もし原爆ドームが取り壊されていたら、人々はこれほど深く戦争や核について考えていただろうか。原爆ドームでは、アメリカを含む世界中から人々が訪れ、涙を流して祈っていた。大川小にも毎日のように日本各地から手を合わせる人が訪れると聞く。遺構が残され、戦争や震災の生々しい恐ろしさを追体験できるからこそ、人は平和や安全の大切さを常に忘れずにいられるのではないだろうか。

我々が社会に出る頃には、東日本大震災から二十年近くが経っている。震災を知る人は年々減っていき、防災意識も低下していくことだろう。それを防ぐために、震災遺構を守り、大切な遺産として次世代に継承していくことが、これからの生きる我々に託された使命ではないかと思うのである。

中学生部門

佳作

兵庫県 姫路市立安室中学校 三年

悲劇のヒロイン病

土屋 結布

私は夏休み前に、「悲劇のヒロイン病」という心の病気にかかってしまいました。この病気の症状では、「私ってかわいそう」と思い、「周りの人達から心配されたい」と思ってしまう。私の場合、引退に近づいている部活と、受験に向けての勉強が両立できず、ストレスが溜まっていたのが原因でした。私はそのイライラを、いつも家族にあててしまっていました。

けれど、学校で担任の先生が私の相談にのってくださいました。自分の悩みを打ち明けると気分が晴れ、今の自分と向き合うことができました。私は、自分の中の手荷物が一杯一杯になっていて、

「自分はこんなに重い物を持っているからかわいそうだ」

と思っていました。それは私が「捨てる」という選択肢を持っていなかったからで、正しい「捨て」を考え、他の部分で自信をつけることで、自分らしく行動することの大切さに気付くことができました。

ある日、ささいな事で母と喧嘩をしてしまったときの事です。母は、学校へ行つて私の担任の先生に、

「どうか私の娘の話を聞いてあげて下さい」

と頭を下げた、ということを打ち明けました。母は毎日仕事に行き、夜中に帰つて来ることも多く、家事も行い、私のストレスを聞かされているのに、私のために「母親の自分ができることは？」と考えて行動してくれたのです。母の方が私より悲劇のヒロイン。このことを、私はもともと知っていたはずなのに、気付かないふりをしていました。「悲劇のヒロイン病」は周りの事も見えなくなるからです。

自分が情けなくて、家族や周りの人に申し訳ない気持ちで一杯になりました。だけど今の私にできることは、過去を振り返って後悔することではなくて、その後悔を生かせるような行動をすることです。背負わなければならない荷物を、忘れずに背負い続けることです。

「言い訳病」「偽装病」など、他にも病気は沢山あります。感染する原因は、私達の生活のあちらこちらにあふれています。私は今だけでなく大人になっても、このような病気にかからないように強い自分をもって、正しい「捨て」をつくらうと思います。また、もし家族や周りの友達に心の病気にかかってしまったら、治療の手助けとなるような手を差

しのべてあげられる人間になりたいです。そして将来、私が命を授かって子供ができたのならば、先生や私の母のように、大切なことを教えてあげるような大人になりたいと思いました。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県立伊丹高等学校 二年

奏でよう、人生の組曲

広石 亜美

「お嬢ちゃん。よかつたら、ぼくのハーモニカを聞いていかないかい？」

学校からの帰り道での事だ。私は唐突に、名前も正体も分からない少し怪しい人に声をかけられた。思わず振り返ると、木陰のベンチに腰かけて、優しそうな微笑みを浮かべながら私を見つめるおじいさんがいた。その右手には古めかしい銀のハーモニカが握られていた。私はこの時、とても怪しい人だと思っていた。しかし同時に、演奏を聴いてみたいといった好奇心に駆られていた。二つは私の頭の中で乱闘を繰り広げた結果、（一曲ぐらいなら聴いてもいいじゃないか）という判断を下した。「じゃあ、お願いします」私はおじいさんの方へ向き直る。すると、おじいさんは嬉しそうな表情を浮かべてハーモニカを構えると、演奏を始めた。演奏は——正直あまり良くなかった。拍の長さ・曲の速さ・音の強弱などが乱れており、とても上手い演奏とは言えなかった。しかし、注意して曲を聴いてみると、たどたどしいがメロディーは分かった。『北酒場』だ。おじいさんがハーモニカを吹き終えたので、私は拍手した。すると、おじいさんは言った。「お嬢ちゃんは演歌と

か歌謡曲なんかで知ってる曲ってあるか？ ぼくが吹いてあげるよ」

これを聞いて私はさすがにまずいと思った。なにしろ私は学校帰りである。家から学校までの距離は遠く、時間がかかる。私は家に早く帰りたくて仕方がなかったが、またしても好奇心に負けてしまい『津軽海峡冬景色』をリクエストした。その後、一曲吹き終えるごとにおじいさんが何か喋るというループに突入し、話についていけなくなった私はただ相槌を打つだけとなり、帰る事はできずにどんどん時間が過ぎていった。おじいさんは次から次へと話題を変えていくので、結果小一時間もかかってしまった。私が話を聞く事に疲れてきた時、不意におじいさんは「一度脳梗塞を発症した事がある」と告げた。その後からは、おじいさんが今まで生きてきた人生の話が始まった。戦後生まれであるため家は貧乏。そのためおじいさんは高校に行かず、兄弟と共に働いて暮らしていたらしい。しかし好きだった演歌や歌謡曲を諦めたくなくて、『スター誕生!!』というオーディション番組に挑戦してみるも落選。年を重ねて結婚するが妻に先立たれ、自身も脳梗塞を発症し――御年七十になるおじいさんは後遺症で呂律が回りにくく、移動には歩行器が欠かせない。そんなおじいさんの話を聴いているうちに、とある疑問が浮かんだ。私は話の切れ目を狙って聞いてみた。すると、おじいさんは少し目を見開いた後、恥ずかしそうに頬をかきながら言った。

「ぼくが、ここでハーモニカを吹いている理由」はね、「人助け」をしたいからだよ」

「人助け、ですか？」

「そうだよ。いつかぼくが上の世界へ行つた時に、上の人からの判断をより良いものにしてくださるよう、こうして散歩のついでにこれを吹いて、行き交う人達の癒しになればなあ……と思つてる。自分が出る範囲で「人助け」をしたいんだ」この言葉を聞いて、私は不意に胸を突かれた。私は吹奏楽部に所属していて、おじいさんと同じく『演奏者』だ。しかし、私とおじいさんの考えている事は違った。(自分の演奏を聴いて癒されて欲しい)と考えているおじいさんに対し、私はただ(部の一員として、上手に演奏する)としか考えられていなかった。他人に対してどう演奏するのかが頭から抜けていた。おじいさんの話を聴いているうちにそれに気づかされた私は、ひどく恥ずかしくなった。自分は、何のために、今まで吹奏楽部員として活動していたのだろうか――。

おじいさんはどうしてハーモニカを吹くのかという話を終えると、じつと私の目を見てきた。つられて私も見つめ返すと、おじいさんはふっと顔を綻ばせた。「お嬢ちゃん、君にはぼくと違ってまだまだたくさん時間がある。音楽で言えば前奏曲を奏で始めたところ。これから先には、たくさんの即興曲が待っているだろう。けど、お嬢ちゃんならきつと乗り越えられる。そして、最後には悔いなき「人生の組曲」を演奏しきるんだよ」……

おじいさんには、私の心がお見通しだったかもしれない。この後いくつか会話をし、私はおじいさんと別れて家に帰るためにバスに乗り込んだ。バスの座席に座った後、私はもう一度おじいさんの言葉を反芻した。

“人生の組曲”、私にも演奏しきる事が出来るのだろうか。

高校生部門

優秀賞

口の中の氷

兵庫県 西宮市立西宮東高等学校 一年

木村 直希

がらんどろになった僕の心を埋め、包んでくれたのは、彼からもらったブックカバーだったのだと、今になって思う。

小学五年生の冬、母は僕に言った。

「西宮に戻ることになった」

その頃僕ら家族は、西宮から千葉に引っ越してから四年程経過していた。だから僕は、千葉に永住すると勝手に思い込んでいた。その突然の決定は、幼い僕にとっていわば「余命宣告」の様なもので……。

母は僕が不安にならない様に、テレビの雑音に邪魔されながら、

「でも、昔の友達に会えるから大丈夫」

と、おどけた様に言った。

無力の為、無抵抗にその決定を受け入れるしかない自分と、午後のニュースの偉そうなコメンテーターの笑い声に、僕は僻易とした。

自分一人だけここに残ることは出来ないものかと、今思えば出来る訳のないことを、ベッドの上で思案していた。

しかし時間ほど、全ての人間に平等なものはない。翌日になると、母はいつも通り朝食を作って、僕もいつも通り学校の支度をしていた。僕はランドセルに、引越すという事実も詰め込んだ。

僕はいつも、友達のマンションの前で待ち合わせをしていた。いつもよりも早くそこに着いたのは、無意識に早足になっていたからだろう。そこにはまだ、僕以外見当たらなかった。

十分程経ち、友達二人が待ち合わせ場所に着き、僕達は学校へと向かった。

登校中、僕は心臓の鼓動を手の平で感じながら、ここで言うべきか、それとも着いてから言うべきか、ずっとそれに嘖まれていた。

何を話しながら歩いていたかは、もう覚えていない。千葉ロッテマリーンズか、ジェフの話はよくしていた。その日も、そんな内容だっただろう。いつの間にか橋を渡り、信号を越え、いつもの門をくぐっていた。

教室に着き、ランドセルを教室の横にあるフックにかけ、「朝の会」を待つ。

「朝の会」が終わって、一時間目が始まる前の五分休みに、僕は母が連絡帳に書いた決

定事項を、担任の教師に渡した。彼はその内容を読み終えると、

「残念なことだけど、仕方の無いことですね」と、眼鏡を少しクイツと上げながら、うつむきながら言った。僕は陰と同化した気分になった。今までの全てが悪い夢で、僕は悪夢に踊らされているのではないかと信じたかった。

しかし、人生はそう甘くはなかった。

昼休みになると僕は、一番仲の良かった友達に「引越すことになった」と伝えた。彼は予想していたよりもひどく驚いて、悲しんでいた。僕は、「でも心配はいらない」と、少し虚勢を張っていた。

僕の為にみんなが悲しんでくれていると思うと、本心とは裏腹に少し嬉しい気分になった。だから僕は少し自慢げに言い触らしていた。でも、言い触らせば言い触らすほど、口の中の氷のように、徐々に心が溶けていくようで、心に水が溜まっていった。

いつの間にか、カレンダーに三月の梅の花が咲いていた。四年間いた学校を卒業できないことに悲しみを覚えた。それよりも、もう友達に会えないと考えると、心に溜まった水が喉まで迫り上がって、文字では表せない音を立てて溢れてしまいそうだった。

クラスでは「お別れ会」を開いてくれ、クラスメイトからの手紙をもらった。僕もクラスメイト全員と他クラスの仲の良かった友達に手紙を渡した。儀式めいた事は嫌いだった

が、それでもその日の出来事は忘れることはできない。

千葉を出発する少し前、僕は一番初めに仲良くなった友達から、ブックカバーをもらった。当時僕はそれほど本を読んでいたのに、何故彼はブックカバーをくれたのかは、五年も経ってしまった為、もう聞くことはできない。でもそれが、僕の人生を大きく変えたのは、紛れも無い事実だろう。

それのお陰で僕は本を読むようになったし、それがなかったら、中学の時に図書委員長にはなっていなかっただろう。

ブックカバーを手取る度、僕は思い出し、感謝をした。ブックカバーは本だけでなく、僕の寂しささえも包み込んでくれたのだ。

高校生部門

佳作

兵庫県 神戸市立神港橘高等学校 一年

私の夢

三好 一那

私には夢がある。着物や浴衣の着付けや、ヘアセットまで、全部できる美容師になりたい。この夢は、実は、私が幼稚園の時から追いつけている夢だ。

美容師になりたい。そう思いはじめたのはすごく些細なことからだ。あの日、母は私を美容室に連れていってくれた。小さかった私は髪の毛を切られているうちに寝てしまったことがあった。目が覚め、鏡に映った私を見て大泣きした。ショートカットになっていたからだ。私は小さい頃から長い髪の毛が好きだった。毎朝、母にいろんなヘアスタイルをしてみらうのが嬉しくて、そんな毎朝が楽しくて仕方がなかった。そんな長かった髪の毛がショートカットになって悲しくて何度も泣いた。大泣きしていた私に美容師さんがくれたのは、ハートのついた可愛らしいヘアピンだった。美容師さんは私の両サイドの髪の毛をすばやく編み込みをし、左側にそのハートのヘアピンをつけてくれた。ヘアピンはとても可愛くて嬉しかったのを覚えている。

家に帰り私は母に聞いた。「なんで髪の毛ショートカットにしたん」と言った。母は、「毎朝、忙しいし、髪の毛をくくるのがめんどろだったから。バツサリ切ったほうが楽やし、

似合ってるよ」と言った。私は似合ってるなんて少しも思わなかった。この短い髪の毛じゃポニーテールもツインテールもできない。そう思いまた泣いてしまった。それでも私は髪の毛をのばしたかった。母に「のばしたい」というとすぐに反対された。それでも聞かない私に、母は「のばしてもいいけど、毎朝、自分で髪の毛をくりなさい。そうできるんなら、いいよ」といった。私はとっさに「わかった。全部自分でするから」と言った。すごく嬉しかった。早く髪の毛のびないかなと毎日毎日ウキウキしていた。

次の日から私は、自分で髪の毛をくるようになった。最初のうちは短いのであんまりできなかつたが、だんだん長くなり、ポニーテールやツインテールもできる長さになってきた。

幼稚園から小学校に上がり私には、友達や先生に必ず聞かれることがあった。「髪の毛毎日、自分でやってるん？」私はすぐに答えた。「そうやで」というと、みんなすごいとほめてくれる。友達には「私にもやって」と言われ、喜んでしてあげていた。すると、みんなが笑顔で「ありがとう」といい、嬉しそうに鏡を見て笑っている。そんな姿を見るのが大好きだった。

中学生の頃、髪の毛の量をすきたくて、毛先も痛んでるから、少し切ろうと思い、美容室に行った。その時の美容師さんと専門学校とか、美容師になるためのことなど、たくさ

ん話していた。すると、美容師さんが言ってくれた。「そんなにヘアアレンジとか上手で好きならヘアスタイリストになったらいいじゃないですか。絶対、僕よりセンスあると思いますよ」と言ってくれた。とても嬉しかった。でも私は、髪の毛を切ったり、ヘアスタイルをセットしたり着付けもサービスできるような美容師になりたいと思っている。だから、ヘアスタイリストだけと、一つにしばらくしないで、なんでもできるようにし、自分の可能性を広げたいと思っている。

私が中学三年生の頃に、初めて、美容室で実際に使っているハサミを手にした。普通のハサミと違いどっしりして重たかった。そのハサミで初めて自分の前髪を切った。美容師さんは私が「美容師になりたい」と知っているの、「自分で前髪切ってみますか」とハサミを渡してくれた。自分で切ってみて、やっぱり私は美容師になりたいと思った。私の夢を知った友達や家族はいつも私に言ってくれる。「早く美容師になって私の髪の毛切つてね」と。その言葉が、私にとっては、心が温かくなる。笑顔で「うん」と答えられる。だから、高校を卒業したら、専門学校に行つて、早くお店を出したい。そう思った。

美容師になつたら私は、一番に母の髪の毛を切つてあげたい。もしあの時、母が私に、「自分の髪の毛は自分でして」と言ってくれなかったら、私は、ヘアスタイルに興味なんてなかっただろうなと思うからだ。美容師になりたいと思えるきっかけをくれた母に感謝した

い。自分でした髪の毛をほめられるたび私はもっと頑張ろうと思えた。

美容師はサービス業だ。将来は、ロボットにとられる仕事が増えているが、美容師は人間にしかできないと私は思っている。いつしか美容師さんが私を笑顔にさせてくれたように、私も人を笑顔にできるような美容師になりたいと思う。たくさんの人に「ありがとう」と言われる美容師になりたい。そして、鏡を見て嬉しそうに笑う、あのステキな笑顔を、私が一人でも多くの人に届けたい。

五年後、少しでも夢に向かって前進していますように。

一般部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市

古の徳利の慰め

原田 裕乃（公務員）

近所に、ガラス張りのスタイリッシュな古美術店がある。そこで面白い徳利を見つけ
た。首が窯のなかでもげたのか、危うく落ちるところをガラス質の釉薬によって胴体とつ
ながっている。その姿が、なんともしぶとく、ほほえましい。薄青の釉薬が白い肌を包み、
あざやかな藍色でシンプルな草の模様が描かれている。すつきりとした、たたずまいだ。
昨秋、ひよんなことから骨董の魅力を知り、小皿や盃を集めはじめ、古伊万里への憧れが
膨らんだ。手にするならこのような肌合い、と思い描いていたものが目の前にある。落ち
かかった首に、歪んだシルエットに、手のひらにすっぽりとおさまる小ぶりの丸みに、愛
すべき表情がある。

値札はついていない。スタッフさんに価格を尋ねると、「社長のお心ひとつ」とのこと。
その社長さんは香港のオークションのため留守なので、後日、出直すこととする。こちら
は一介の公務員、しかもこれから教育費のかかる娘二人を抱える母親の、乏しい小遣いで
賄える価格だろうか、不安がどっと胸に押し寄せる。しかし、一目惚れの徳利である。

憧れの君に振り向いてもらえるかどうか、淡い期待がだんだんと熱を帯びてくる。恋同然の心境に陥り、胸が高鳴り、夢にまで見る。

一週間後。手前に引くべきガラス扉を奥に押し、内側にあつた足元マットを扉の下にズルズルと巻き込んで入店する。いかに自分が緊張しているかに気づいた動揺を隠しつつ、先のスタッフさんに社長さんのお返事を問うと、「これは実用に耐えないということので売り物ではないそうです。すみません」と、あっさり振られてしまった。「ご縁がありませんでしたか。この徳利がうちに来てもらえるかどうかを想って、一週間、楽しい夢を見させてもらいました」と、胸の内を述べ、今度は正しい方向に扉を開けて店を出た。

三日後。社長さんとは以前、名刺交換していたので、思い切って電子メールを送った。非売品の徳利、夢見るほど気に入ったこと。実用には耐えなくとも、心を楽しませてくれる品と感じたこと。「ちなみに、あの徳利は、いつの時代のどこの地域の出身でしょうか。もし、今後、似たようなテイストの酒器がありましたら、ぜひ頂きたく思います」と、肝心の懐具合についても触れて、次の良縁を待った。

すると二日後、返信が届いた。「あの徳利は、あくまでも推測なのですが、当時の職人が遊び心で故意に首を曲げて作ったものと思われまます。時代は一五〇年ほど前のもので九州の伊万里焼です。そこまでお気に召されているのでしたらお譲り致しましょうか」。欣

喜雀躍とはこのことである。しかも価格は、私が提示した予算の上限よりも一段階お安かった。

徳利の受け取りには、夫の同道を求める。相手の機嫌の良い時を見計らってこちらの趣味に静かに巻き込むのが、家内安全の定石である。理系研究職の彼は、徳利の首の曲り部分を一目見て、「注ぎ口と本体の径が違う」と指摘し、社長さんの「故意に歪めた」説を支持する。帰宅すると、存外、夫の方が楽しんで、煮沸作業に取りかかる。一五〇年ぶりの湯船だろうか、かつての持ち主は誰だろう、と想像を膨らませるのも楽しい。しっかりと湯冷めをさせた後、まずは水を注入して傾けてみるが、跳ね返りが強く、水は盃の外にも飛んでしまう。しかし、我が家御用達の日本酒にしてみると、じよぼじよぼとぎこちなく、盃の中におさまった。「酒は水よりも表面張力がないので、ちゃんと出てくる」と、ここでも理系の解説が入る。

徳利として甦った君を手にとって、つくづくと眺めてみる。憧れの君を掌中にする、それは一転、自分の分身のように思えてくるから不思議である。首の皮一枚で持ちこたえ、徳利としての責務を果たす姿は、今の自分の姿と重なる。

中年期の真つただ中、日々組織に合わせ、組織を維持するための仕事に人生の時間を費やしていることに、個としての自己の輪郭が消失していく怖さを感じることが増えた。来

し方を振り返ると、生の充実をもっとも味わったのは、娘たちが赤ん坊の頃だったことに思い至る。我が子の成長に眼をみはり、透明な気持ちになって、新しい世界が開けていく喜びに満たされていた。その娘たちは今、学校社会への適応に心身のエネルギーを投入し、本音と建前を使い分けるスキルの習得に精進している。

朝、床の中で目覚め、強烈な虚しさに胸をつかまれることがある。何かを失った、という確信。時間をもとに戻せない現実。しかし、首の曲がった徳利を手に行っていると、不思議と慰められる。首が曲がったまま一五〇年を生き残った、その存在の確かさに、そっと慰められるのである。

一般部門

優秀賞

愛媛県 伊予郡

おみちように

高市 俊次（無職）

菜の花が咲くころになると、伊予路に白衣、菅笠、金剛杖をつき、手に持鈴をたずさえたお遍路さんの姿が見えはじめる。子どものころは、みんな歩き遍路だった。家からさほど遠くないところに、札所が二カ所あって、家のまえのあぜ道を通っていった。

家の近くに茶堂とよばれていた農家の人の休憩所があったが、そこではお遍路さんもなく休んだ。

毎年、春になるとやってくる親子連れの遍路がいた。彼岸花の咲くころにやってくる秋遍路も多いのだが、その親子連れは、いつも春にやってきた。

まだ私は小学生だったが、母にいわれて、草餅やうどんを運んだことがある。草餅は、前の日に摘んだよもぎ餅だった。

もうそろそろ姿を見せるころだけど。母は菜の花が満開になると、心待ちにするようになった。

持鈴の音が、もつれるように聞こえてくる。まちがない、あの親子だよ。母に表に出してみるようにいわれた。一緒にやってくるのは娘さんで、すこし右手が不自由なようだった。

た。

二つの鈴の音がそろわず、どこかもつれるように聞こえてくるのは、そのせいかも知れなかった。

母と私は、茶堂にでかけた。母の手にしていたお盆には、ぼた餅がのせてあった。今年のは、ぼた餅にしましたよ、母はそんなことをいいながら、世間話をしていた。

茶堂の裏は小高い松林で、よく春蟬が鳴いていた。子ども仲間では松ゼミといっていて、一度つかまえてみたいのだが、誰もとつたものはいなかった。

その親子はそんなことも覚えていて、話題になった。その時もいつときばかり休んで、ぼた餅を一つずつ食べた。母は残ったぼた餅を経木で作った折箱に入れて、持たせていた。茶堂をあとにするとき、母はいつも「おみちように」といって、見送った。その親子がすこし歩いて立ち止まりふりむくと、母はまた「おみちように」といった。

母のふるさとは、新潟の糸魚川だった。父と出会ったのは、二人が高校を出て働いていた東京だと聞いていた。

母はお盆のころになると、子どもを連れて里帰りした。昭和三十年代はじめの列車は木枠窓で、固い直角の座席だった。ずいぶんと遠かったが、駅に着くとそこからまた、ボンネット型のバスに乗った。

母は兄弟姉妹が多く、いとこたちが集まって遊んだ。遊ぶといつても、田舎町のことであつたから、小川をせき止めて鮎やめだかをとったり、年長のいとこに教わつて、竹を細工して水鉄砲を作つて遊んだりした。

同じいところで女の子たちは手まりをついたり、木蓐をとつてきて、ままごと遊びや草遊びだった。私には姉がいたが、中にきれいな色系でかがつたまりを持っているところがない、しばらく欲しがっていた。

祖父母はまだ健在で、一週間ばかりいて家に帰る時、バス停の前で「おみちように」といつて、手を振つた。

その親子連れの遍路は、三年続けてやつてきた。最後の年だったが、私はその娘に草花遊びを一つ教わつた。その日、母にいわれて草餅とお茶を持っていくと、彼女は手甲を取つて春の日だまりに掌をかざしていた。

ツユクサの花をたくさんと、いらなくなったお茶碗に水を入れて持つてくるようにいわれた。ツユクサは、畑の隅にいくらもあつた。

持つていくと、彼女はその花を水の中に入れ、ていねいに指先で揉んで、空色の色水を作つた。その上に、そつと紙を落とすと、きれいな色紙ができた。それは、私がしたことのない女の子の草花遊びだった。

控えめな女性で、お接待の餅やうどんを持っていても、ほほえみながらありがたいとうとうだけだったが、紙が染まっていくのを驚いてみている私をみる眼差しは、優しかった。今思うと、子どものころの遊びは、ほとんど自然にかこまれた中で工夫したものだ。草花の名前を母や姉に聞いてうるさがられたのも、そのころからだ。

次の年の春、その親子連れの遍路はこなかった。夏が過ぎた。今年も秋に来るかもしれないね、と母はいった。

秋が深まってくると、音が澄んできて、遠く海岸線を走る夜汽車の音が枕元にとどいてきた。

私はその親子が汽車でやってくるものとばかり思っていたが、九州から船でやってくるそうだった。母は知っていたのだろうが、それがどこかはいわなかった。

「おみちように」が、「お道良うに」であることを知ったのは、ずっとあとのことである。道中ご無事だという意味だった。

一般部門

佳作

東京都 大田区

何でもない日に

星 香弥乃（主婦）

その日は牛赤身の塊肉を二キロほど切ってもらっていた。普段は毎度どうも、としか言わない精肉店の、店長と思しきおじさんがレジを打ちながら聞いてきた。

「これで何作るの？」

「ああ、コーン・ド・ビーフです」

「え？コンビーフ？」

「いえ、ちよつと違つて……」

私は完成まで一週間ほどかかる、手の込んだ牛肉料理を解説した。

「へえー、そんなのを作るの。凄いねえ」

「食事会を友達とするもので」

「あ、そうなんだ。いや、あの人はどういう人だろうって店のみんなと話してて」

普段は安い豚小間や鶏挽肉をこまめに買うのに、月末の牛肉半額セールには決まってキロ単位の肉塊を買っていく、あの人（つまり私）は一体何者なのか。歳はまだ二十代半ば

くらいだし、まさか一人で食べはしないだろう。様々に憶測するなか、おじさんは「若くして結婚し、食べ盛りの子どもを抱えたお母さん」という設定を推していたそうだ。

実際は夫どころか彼氏もいなかった私は、子持ちに見えたことに少しばかり傷ついた。一方で街角の肉屋の日常に、私がほんの少し楽しみを添えていたのなら、それは面白いことのようにも思った。私は兄と二人暮らしで、節約のため三食自炊をしていることと、友達五、六人を招いて月一回、会費制の食事会を開いていることを伝えた。

「なんだあ、そうなの」

予想が外れたおじさんはちよつと残念そうだった。

以来、お店でおじさんとは何くれとなく話をするようになった。若い頃はバイクを乗り回し、女の子を口説き、喧嘩っ早かったという。人の好い柔らかな笑顔からは全く想像できない姿だった。喘息の持病がある奥さんと、小学五年生になる娘さんがいることも聞いた。「結婚が遅かったからねえ。子どもにさ、お金をかけようと思っても、老後のことがあるからさ、やってあげられないの。カミさんも身体弱いしね。だから結婚は早い方がいいって」おじさんは私に決まった相手がないことを知ると親身になって言ってきた。

「あなたが今一番しなくちゃいけないのは、彼氏を見つけて結婚すること」
包んだ豚挽肉を手渡しながら、真顔で言われたりもした。両親から言われたら、きつと

口論になっていただろうことも、おじさんの口からだと思議と素直に聞けた。

二十歳の頃、親の反対を押し切って料理の世界へ飛び込んだ。しかし、たった二年で病を得て挫折。他に頼るところもなく、実家に戻った私と父母とのわだかまりは、そう簡単に拭えるものではなかった。病気だけでなく家族との軋轢にも苦しんでいた私を見かねた兄が、二人暮らしを提案してくれたときは、涙が出るほどありがたかった。

早く自立したい、そう強く思った。私は見様見真似でパソコンを覚え、短時間のアルバイトを手始めに、少しずつ働く時間を延ばしていった。体が思うようにならず、仕事を辞めざるを得なかったことも幾度かあった。紆余曲折を経て、ようやく安定した仕事に就いたとき、私は二十六歳になっていた。もう一度好きだった料理を楽しまたくて食事会を開くようになったのは、その少し先で二十七歳になってからだ。仕事を失う度に、喉から手が出るほど欲しかった「何でもない日常」によく辿り着いていた。

おじさんと親しくなってから、一年が過ぎた頃、食事会を通じて知り合った人が彼氏になった。余暇をデートに使うようになった私は食事会を開かなくなり、おじさんのところへも足をむけなくなっていた。彼氏とは付き合っただけで二ヶ月ほどとんとん拍子に結婚することになった。結婚が決まったとき（あ、おじさんに報告しにいかなくちゃ）と当たり前に思った。

久しぶりに店に入ると、そこにおじさんの姿はなかった。店の奥を覗いても、いる気配がない。怪訝な顔をしていたのだろう、私を見たパートのおばさんが奥から出てきて

「亡くなったんですよ。まだお子さんも小さいのに……」

と声を詰まらせた。葬儀が終わって半月ほど経っていた。クモ膜下出血だったそうだ。

私は自分の愚かさを悔いた。今日の続きが明日必ずくる保証など、どこにもないことを、身をもって知っていたはずではないか。私はなんと忘れっぽい生き物なのだろう。結婚の報告は、結局お店の人にも言えなかった。

今、長女はあの時のおじさんの娘さんと同じ歳になった。コーン・ド・ビーフはあれ以来一度も作っていない。いつかレシピと、それにまつわるおじさんの話と、私の悔恨の記憶を娘に伝えてみたいと思っている。

平成 30 年度 第 4 回 藤原正彦エッセイコンクール

概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和 18 年 旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和 53 年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成 22 年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成 26 年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『決定版この国のけじめ』『天才の栄光と挫折』など著書多数。
平成 26 年 4 月、姫路文学館長に就任。
近著に『国家と教養』。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400 字詰め原稿用紙 5 枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。平成 30 年 9 月 13 日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各 1 編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 2,080 点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県
		姫路市内	姫路市外	県合計	
中学生部門	120 点	102	16	118	2
高校生部門	1,321 点	1,134	181	1,315	6
一般部門	639 点	96	99	195	444
合計	2,080 点	1,332	296	1,628	452

中学生部門：市外では、加古郡、赤穂市、宝塚市、千葉県、宮城県から応募があった。
学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は 16 校であった。
個人応募は 3 人であった。

高校生部門：県外では京都府、大阪府、東京都、徳島県から応募があった。
学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は 11 校であった。
個人応募は 5 人であった。

一般部門：10 代から 90 代まで各世代から応募があったが、そのうち 60 代以上が過半数を占めた。
他府県からの応募は、北海道から沖縄県まで全国各地に及んだ。

■ 表彰式

日時：平成 31 年 1 月 12 日（土）午後 1 時 30 分～3 時
会場：姫路文学館 講堂（北館 3 階）